

植物季節と自然教育

渡 辺 隆 一

第110回例会において、上記の標題で以下のよう
な発表をおこなった。

1. 最近、自然観察や日々の気象といった身近な自然環境への関心が高まってきた。季節の移りかわりについても、変化の少ない都会的生活が増えたためか、季節感が求められるようにもなった。植物季節は、こうした自然環境への関心を満たし、かつ自然の構造やその全体像を理解させるのによいテーマである。又、その研究も少しずつ増えてきた。

2. 植物季節はごく簡単には、「個々の植物種が、それぞれの立地でいつどのような生活相をみせるか」、「又、それらの時期と環境(気象条件等)との関連」についての研究である。最近の研究成果について3つの例をあげた。菊沢(北海道立林試)は開芽、落葉の時期や模式がその種群の進化、系統関係と強い関連をもつ事を、カバノキ科を材料として明らかにした。永田(三重大農学部)はサクラの開花前線が必ずしも南の鹿児島からではなく、年によっては伊豆あたりから南北に広がってゆく事から、その開花生理と気温条件とを実験によって研究した。また、サクラ、ウメ、サザンカ等の開花時期の相異についても実験によってその内部機構を明らかにした。渡

辺(信大志賀研)は志賀高原を対象に、植物の開芽、開花等の時期の標高による変異、又年による変異を調査し、それらは植物種毎に異なった様相をもっており、単純な気象条件にのみよっているのではない事を示した。

3. 自然教育は多様な要素をもつが、現在の理科教育の中では不十分なものとして、実際の野外の自然に親しむ事、それらを食物連鎖とか物質循環とかの抽象的な形としてではなく、実際に共に生活している全体としてとらえる事などがある。こうした面では、学校の片すみの雑草地とか、裏山の林とか、身近な自然を季節毎にくりかえし観察する事によってそうした自然が、主に植物による季節変化によってその表情を季節毎に変化させ、又その事によって動物達の生活も又変わってゆく事を実際に観察し、理解できる。中、高の生物クラブ等でこうした観察を長期継続する所までできている。気象クラブ等のように一定の方法で長期、又各地の資料等の相互比較をおこなえばより自然というものがダイナミックに動いているもの、又日本全体、世界中の自然へとつながり広がっているものだという事が理解されるようになるであろう。

〔交換図書雑誌目録(54頁よりつづく)〕

わたしたちの自然史(北九州自然史友の会) No11-20, 1982~85

生物研究会誌(福岡大学生物研究部) No 15, 1985

福岡の植物(福岡植物研究会) No 11, 1985

福岡植物研究会会報 Vol. 8, No 1~5, 1985~86

長崎県生物学会誌(同会) No 28~30, 1985

熊本記念植物採集会月報(同会) S. 60, 4・5月~S. 61, 3月, 1985~86

Botany(熊本記念植物採集会) No 35, 1985

Bull. Torrey Bot. Club (N. Y. Bot. Gard.) Vol. 112, No 1~2, 1985

2. 図書・その他

信州大学環境科学論集 No 8 (信大環境問題研究教育懇談会) 1986

安曇野の自然と文化の変遷に関する総合的研究 No 1 (松田松二編) 1985

石鎚山とその周辺(愛媛県立博物館) 1985

〔新刊紹介〕 浅野一男・伊知地国夫「伊那谷の植物」A 5判, 261頁, 信濃毎日新聞社, 2,200円。

信毎発行の植物関係の案内書は、4月20日発行の本巻で20冊目となった。県民の方々をはじめ一般にこの種の本が普及し、植物愛好者がふえ、正しく植物が愛好されていくことは大へん喜ばしい。

さて、本書は植物案内書ではあるが、ふつうの図鑑とは異なって、野外と地域に密着した立場が貫かれているのが嬉しい。つまり、植物の取り上げ方は植物帯ごとに林縁から林内へといった方法を用い、植物写真の多くはその生育地をも語っていること。「わたしのいう植物の名が出てくる図鑑を……」という地元の方々の要望に応じて植物の方言名をふんだんに取り入れ、かつ、植物民俗の章も設けていることは今までに例をみない特色といえる。市町村誌と植物誌の役割を兼ね併せたユニークな案内書というのが適切なところであろうか。第一章として「自然環境と植物」の総論も設けられている。(T.S.生)